

要 旨

中学校教員の self-cutting 生徒への認識と対応の困難要因

小 笹 祥 子

学校精神保健において、自傷行為は重要な問題の1つであり、中学生の男子8.0%、女子9.3%に self-cutting の経験が認められている (Izutu, et al 2006)。今や中学校現場において self-cutting は特別なものではなく、日常的に起こりうる事象として認識する必要がある、中学校教員にも適切な対応が求められている。しかし、中学校教員の self-cutting をする生徒への認識と対応に関する報告は少ない。そこで本研究では、中学校教員の self-cutting をする生徒への認識と対応の困難要因を明らかにし、それらの生徒に対応する中学校教員への支援の検討を目的とし、首都圏近郊の中学校8校の教員173名を対象に自記式調査を実施した。

調査票の回収率は61.8%で、対象者の勤務経験年数は1~38年であり、平均17.7年であった。50%の中学校教員に self-cutting をする生徒への対応経験があった。対応経験の有無と性別および年代の関係は認められなかった。対応のきっかけは、「生徒から直接傷を見せられた」が多かった。大部分の中学校教員は、「生徒に相談されると助けてあげたい」「生徒に相談されるとうれしい」と強く感じており、援助指向性が高いという特徴が示唆された。

中学校教員の self-cutting に対する認識では、原因については「家庭」、目的については「寂しいから」「他人の反応を見る」「自己アピール」を選択した者が多く、「自己アピール」「他人の反応を見る」さらに「イライラの解消」を選択した者は、self-cutting をする生徒への対応経験があった教員に有意に多かった。一方で、self-cutting の目的は「死ぬためである」を選択した教員は少数であった。対応の困難要因としては、対応経験のある教員の約半数が「対応方法がわからない」と回答し、そのうち担任の立場で対応した教員の約半数は「親に言わないでと言われた」と回答していた。中学校教員が対応方法を最初に相談する教職員としては、約半数が学年主任・学年教員をあげており、継続的な対応では、「学年で対応」「スクールカウンセラーと対応」「養護教諭と対応」との回答が多く、「学年で対応」「養護教諭と対応」は対応経験のあった中学校教員で有意に多かった。また、self-cutting をする生徒への対応に関しては「専門機関との連携」「保護者との連携」が必要と考える中学校教員が多かった。

中学校教員への支援には、学校内の支援体制の構造化と self-cutting の中学校教員への研修の充実、学校での対応の限界設定が重要であると示唆された。

Key words : self-cutting , junior high school student , junior high school teacher,

response capability

自己切傷, 中学生, 中学校教員, 対応力